Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University. 2005,Vol.8, 45-50.

論　文

外傷体験後のポジティヴレガシーに関する研究
― 日本語版外傷体験後成長尺度（ＰＴＧＩ）作成の試み ―

田口　香代子・古川　真人

Positive Legacy After Trauma:
Developing the Japanese Version Of the Posttraumatic Growth Inventory (PTGI)

Kayoko TAGUCHI and Masato FURUKAWA

The Posttraumatic Growth Inventory (PTGI) was translated into Japanese and its reliability and validity was examined. Female undergraduate and junior college students (N=252) completed a questionnaire and valid data were obtained from 213 of these participants. Factor analysis with varimax rotation was performed and the correlation coefficient between PTGI and several scales was calculated to examine the validity of the scale. Major findings were as follows. (1) The Japanese version of PTGI consisted of two factors: (a) Realization of situation surrounding the self and (b) Discovery and certainty of self-competence. (2) The Japanese version of PTGI was unrelated to social desirability and neuroticism. The scale was positively correlated with optimism, extraversion, openness to experience, conscientiousness, and agreeableness. (3) The Reliability of the scale based on internal consistency was satisfactory.

Key words : The Posttraumatic Growth Inventory（外傷体験後成長尺度）, Reliability（信頼性）, Validity（妥当性）

問題と目的

トラウマ（trauma）という用語には，常にネガティヴなイメージが持たれている。

しかし，ものごとには常に両面があるように，近年，そのポジティヴな側面への関心も高まってきている。

わが国においてトラウマという用語が一般的に広まったのは，1995年に起きた阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件がきっかけとされている（黒木，2003；加藤，2005）。震災や事件の後，PTSD（Posttraumatic Stress Disorder；外傷後ストレス障害）を発症する例が多数報告され，それとともにトラウマという用語も日常的にも広く認識されるようになった。

学術用語集（日本学術振興会，1995）によると，trauma は，①トラウマ，②心的外傷，③外傷体験と邦語訳されている。しかし，②心的外傷と③外傷体験では，意味が大きく異なり，②は精神的ダメージそのものを，③は精神的ダメージを被る体験を指すことになる。一方，大家ら（2003）は，トラウマを外傷と捉え，PTSD 研究において，「ストレス」，「ストレッサー」，「トラウマ」，「外傷体験」の４つの用語を次のように定義している。

人には通常の精神活動を支える心的機構が存在すると想定し，心的機構に対する外的な力（刺激・できごと・状況等）を「ストレッサー」と呼ぶ。このストレッサーに直面した時の感情体験（強い恐怖や無力感，戦慄，苦痛等）を「トラウマ＝外傷」と呼ぶ。ストレッサーとトラウマにより，心的機構に後（post）に生じた歪曲を「ストレス」と呼ぶ。また，「外傷体験」とは，PTSD

の原因となるストレッサーとトラウマを包括した概念をさすとしている。以上のように，トラウマという用語の定義は，現状では統一されていない。そこで，本研究においてはトラウマを外傷体験と捉え，大家ら（2003）に倣い，ストレッサーに直面した時の感情体験を包括してその定義とする。

トラウマが原因となり発症するPTSDの研究においては，近年，有益性発見（finding benefit）という概念の成立に力が注がれている（Affleck & Tennnen, 1996；Davise, Nolen-Hoeksema, & Larson, 1998；Janoff-Bulmann, & Frantz, 1997）。有益性発見とは，困難な状況においてポジティヴな意味や有益性を見出すことであり，それによりネガティヴな側面が最小にされたり，緩和されたりするという（Davise et al., 1998）。いわば，ネガティヴな体験に潜むポジティヴな側面に焦点をあてた研究である。これらの研究をもとに，わが国においても，坂口（2002）が，死別の問題をPTSDの観点から検討し，有益性発見尺度の作成を試みている。死別の問題に限ると，以前から，死別体験者は，単に悲嘆を経験するだけではなく，悲嘆そのものに人間的成長を及ぼすポジティヴな変化がみとめられるという見解があり（小此木，1983；小島，1988；瀬藤・丸山，2004；坂口・柏木，2000；瀬藤・阪・丸山，2004），坂口（2002）の研究は，この問題に対する初めての実証的研究といえる。

死別は外傷体験の一つであるが，わが国においては，死別以外の外傷体験に関するポジティヴな側面に焦点をあてた研究はまだみられない。一方，海外においては，Tedeschi & Calhoun（1996）やMcmillen & Fisher（1998）らが，トラウマによる人間的成長を捉える尺度を作成している。

なかでもTedeschi & Calhoun（1996）は，その論文題目にて，外傷体験後の成長を「ポジティヴレガシー」と表現している。たとえ，外傷体験に遭遇しても，そこに人間的成長があり，精神的により深みを増すことができるなら，一般的に悪とされていることがらは，必ずしも悪い結果のみをもたらすわけではないことになる。また，外傷体験による人間的成長を明らかにすることは，そのできごとからの立ち直りを解明する手がかりを得ることである。そこで，本研究では，Tedeschi & Calhoun（1996）が作成したThe Posttraumatic Growth Inventory（以下，原版PTGIとする）を取り上げ，その日本語版作成を試みる。

Tedeschi & Calhoun（1996）は，先行研究のレビューから，外傷体験後の成長に関連した34項目を収集し，心理学を専攻する大学生604名に調査を行った。調査対象者は，いずれも過去５年の間に重大なネガティヴライフイベントを経験しており，その内容は，死別（36%），事故によるけが（16%），両親の別居または離婚（８%），人間関係のトラブル（７%），犯罪被害（５%），学業上の問題（４%），望まない妊娠（２%），その他であった。調査によって得られたデータをもとに，最終的に，①他者とのつながり（Relating to others），②新たな可能性（New Possibilities），③人間的強さ（Personal strength），④心の変化（Spiritual change），⑤人生の再認識（Appreciation of life）の５因子からなる21項目が原版PTGIとなった。原版PTGIの内的整合性は，α＝.91，再検査法による相関はr=.71であった。弁別的妥当性に関しては，被検者が社会的規範からみて望ましいとされる方向で設問に答える傾向を捉えるCrowne, D. P., & Marlowe, D（1960）のSocial Desirability Scaleとの無相関，併存的妥当性に関しては，楽観主義傾向を測定するScheier, M. F., & Carver, C. S.（1985）のThe Life Orientation Testとの正の相関（r＝.23）が報告されている。また原版PTGIとパーソナリティ特性との関連を探るために実施したThe NEO Personality Inventory（Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. R, 1985）においてはNeuroticismを除く全ての因子との正の相関が報告されている。

以上を踏まえ，日本語版外傷体験後成長尺度（以下，日本語版PTGIとする）の作成および尺度の信頼性，妥当性を検証することが本研究の目的である。

方　法

調査対象者および調査方法

調査は2005年10月から2006年１月の期間に，首都圏の私立女子大学生，私立女子短大生252名を対象に質問紙を実施。有効回答数は213名(84.5%)，平均年齢20.01歳（SD＝2.29）であった。質問紙は，郵送法または大学の講義時間内に集団実施した。

質問紙の構成

1．フェイスシート

年齢，所属学科，学年について回答を求めた。

2．日本語版 PTGI

原版PTGI（Tedeschi & Calhoun，1996）21項目について，原版に忠実であること，表現の適切さを念頭に置き，第2著者，大学の心理研究所職員1名および第1著者の3名で邦語訳を行った。さらに邦語訳上の誤りを避けるため，日本語と英語に精通した在日の大学心理学科講師にバックトランスレーションを依頼し，日本語版PTGIとした。各項目について，「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの6件法で回答を求め，6点から1点までの得点化を行った。

3．Big Five尺度（和田，1996：以下Big Five とする）

日本語版PTGIの妥当性を検証するため，Tedeschi & Calhoun（1996）が実施したThe NEO Personality Inventory（Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. R., 1985）に対応するものとして使用。①神経症傾向（Neuroticism），②外向性（Extraversion），③経験への開放性（Openness to experience），④調和性（Agreeableness），⑤誠実性（Conscientiousness）の5因子で構成されている。計60項目について，「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの7件法で回答を求め，7点から1点までの得点化を行った。なお，和田（1996）では，Neuroticismは，情緒不安定性と邦語訳されているが，本研究においては，神経症傾向とする。

4．日本語版Social Desirability Scale（北村・鈴木，1986：以下，SDSとする）

日本語版PTGIの弁別的妥当性を検証するために使用。計10項目について，「はい」「いいえ」で回答を求め，「はい」を1点，「いいえ」を0点とし，得点化を行った。

5．楽観主義尺度（中村ら，2000：以下，LOT とする）

Scheier, M. F., & Carver, C. S.（1985）のThe Life Orientation Testを邦訳したものであり，日本語版PTGIの併存的妥当性を検証するために使用した。「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求め，5点から1点までの得点化を行った。中村ら（2000）は，①楽観的自己感情，②悲観的自己感情の2因子を抽出しているが，Scheier, M. F., & Carver, C. S.（1985）は，1因子を主張している。本研究では，Scheier, M. F., & Carver, C. S.（1985）および原版PTGI（Tedeschi & Calhoun，1996）の作成に倣い，1因子として使用し，分析を行った。

6．外傷体験

過去5年間で最も辛かったできごとおよびできごとを体験した時期について回答を求めた。

結　果

調査対象者の外傷体験

本研究における調査対象者の外傷体験は次のようであった。①「人間関係上のトラブル・問題」62名（29.1%），②「死別」32名（15.0%），③「学業上の問題」26名（12.2%），④「恋愛に関するトラブル・問題」23名（10.8%），⑤「自身における心身の病気・不調、怪我」11名（5.2%），⑥「家族・親族における心身の病気・不調」8名（3.8%），⑦「その他（事故，中絶，ペットの死，犯罪被害等を含む）」51名（23.9%）

日本語版ＰＴＧＩの因子分析

Tedeschi & Calhoun（1996）は，原版PTGIの作成過程において，尺度の成分を最大限に区分するために，バリマックス回転による主成分分析を行っている。しかし，本来，主成分分析では回転は行わないため，本研究では主因子法を用い，分析を行った。その結果，本研究においては，原版PTGIにみられる5因子構造が認められなかった。その理由として，そもそも，原版PTGIは内的一貫性が非常に高く，それをあえて先述のように主成分分析により，尺度の成分を区分していることの影響があると考えられる。そこで，改めて同様の手法により，探索的に分析を行い，因子の解釈の可能性を考慮し，2因子とした。さらに両因子に負荷が高いものと，因子負荷量が基準に満たなかった2項目を削除の上，再度分析を行い，最終的に，2因子を有する19項目を日本語版PTGIとした（Table 1）。

日本語PTGIの第1因子は，原版PTGIにおける第1因子「他者とのつながり」，第4因子「心の変化」，第5因子「人生の再認識」の項目から構成されており，第2因子は，原版PTGIの第2因子「新たな可能性」，第3因子「人間的強さ」

Table 1　日本語版外傷体験後成長尺度の因子分析結果（主因子法，バリマックス回転）

		因子1	因子2	共通性
第1因子				
人のありがたみを痛感した	（他者）	.763	.152	.606
他人に対して思いやりを持つようになった	（他者）	.684	.353	.592
毎日を感謝して過ごすようになった	（人生）	.658	.288	.516
他人に対して親密さを感じるようになった	（他者）	.647	.348	.541
困ったときに頼りにできる人がいることが分かった	（他者）	.631	.231	.452
自分は他者を必要としていることに気づいた	（他者）	.601	.115	.375
人間関係を良くする努力をするようになった	（他者）	.543	.313	.393
人生において何が大切かが分かった	（人生）	.517	.202	.307
自分の人生は価値あるものだと気づいた	（人生）	.482	.369	.368
信心深くなった	（心）	.459	.362	.342
以前よりも精神的なことがらへの理解が深まった	（心）	.440	.344	.312
第2因子				
ものごとを解決する術を得ることができた	（強さ）	.202	.690	.517
自分は困難に対処することができるということが分かった	（強さ）	.247	.648	.482
変化を必要としていたことについて、動き出そうと思うようになった	（可能性）	.402	.629	.558
人生は自分の力でより良くすることができると思った	（可能性）	.191	.614	.414
それまで経験しないような新しいできごとにも対応できるようになった	（可能性）	.201	.600	.401
自信がついた	（強さ）	.216	.590	.395
新たな興味関心を見つけた	（可能性）	.304	.520	.363
自分は思っていたより強いことに気づいた	（強さ）	.184	.464	.219
固有値		7.02	1.16	
因子寄与率（%）		36.96	6.09	
累積寄与率（%）		36.96	43.05	

註）括弧内は、原版外傷後成長尺度（Tedeschi & Calhoun, 1996）における因子分析結果による分類
他者＝他者とのつながり、可能性＝新たな可能性、強さ＝人間的強さ、心＝心の変化、人生＝人生の再認識

の項目から構成されていた。各因子の項目内容から，第１因子を「自己をとりまく状況への気づき」，第２因子を「自己能力の発見・確信」と命名した。

また，信頼性を検討するため，各因子について，クロンバックのα係数を算出した結果，第１因子はα＝.89，第２因子はα＝.85，尺度全体ではα＝.92という値を示した。

日本語版ＰＴＧＩとＬＯＴ，ＳＤＳとの関連

次に，尺度の併存的妥当性，弁別的妥当性を検証するため，日本語版PTGI，LOT，SDSの各変数に対して相関係数を算出した（Table 2）。その結果，日本語版PTGIとLOTとの間に正の相関（r=.223，p<.01）がみられ，尺度の併存的妥当性が確認された。また，日本語版PTGIとSDSとの間には相関がみられず，尺度の弁別的妥当性が確認された。

Table 2　日本語版外傷体験後成長尺度とBig Five，LOT，SDSとの相関関係および記述

	日本語版PTGI			Big Five					LOT	SDS	*M*	*SD*
	Factor1	Factor2	計	外向性	神経症傾向	経験への開放性	誠実性	調和性				
日本語版PTGI Factor1	—										40.32	11.68
日本語版PTGI Factor2	.601 **	—									20.86	7.62
日本語版PTGI計	.936 **	.843 **	—								61.18	17.37
外向性	.344 **	.370 **	.394 **	—							54.23	12.34
神経症傾向	-.015	-.219 **	-.106	-.274 **	—						59.16	12.11
経験への開放性	.199 **	.318 **	.274 **	.477 **	-.257 **	—					50.85	10.80
誠実性	.135 *	.180 **	.169 *	.212 **	-.003	.181 **	—				45.51	9.82
調和性	.182 **	.196 **	.209 **	.265 **	-.189 **	.144 *	.378 **	—			52.46	10.54
LOT	.172 *	.243 **	.223 **	.368 **	-.379 **	.263 **	-.070	.234 **	—		23.34	4.95
SDS	.110	.073	.106	.068	-.054	.011	.168 *	.372 **	.048	—	3.45	1.73

**: $p<.01$　*: $p<.05$

日本語版ＰＴＧＩとBig Fiveとの関連

日本語版PTGIとパーソナリティ特性との関連を探るため，日本語版PTGIとBig Fiveの各因子（①神経症傾向，②外向性，③経験への開放性，④調和性，⑤誠実性）について相関係数を算出した（Table 2）。その結果，PTGIと外向性（$r=.394$，$p<.01$）・経験への開放性（$r=.274$，$p<.01$）・誠実性（$r=.169$，$p<.05$）・調和性（$r=.209$，$p<.01$）との間に正の相関がみられた。また，日本語版PTGIと神経症傾向との間には相関がみられず，原版PTGIにおける結果と同様の結果が得られた。

考　察

探索的因子分析の結果から，日本語版PTGI尺度は２因子から構成されており，原版PTGI尺度が有する５因子構造（①他者とのつながり，②新たな可能性，③人間的強さ，④心の変化，⑤人生の再認識）とは異なる結果を得た。しかし，特筆すべきこととして，日本語版PTGIの第1因子「自己をとりまく状況への気づき」に原版PTGIの第1因子「他者とのつながり」，第４因子「心の変化」，第５因子「人生の再認識」が組み込まれ，同じく日本語版PTGIの第２因子「自己能力の発見・確信」に原版PTGIの第２因子「新たな可能性」，第3因子「人間的強さ」が集約されていることがあげられる。このような２因子構造が確認された理由として，原版PTGIの内的整合性は$\alpha=.91$と非常に高く，著者らがバリマックス回転による主成分分析にて５因子構造を導き出していることがあげられる。原版PTGI各因子の項目数に，ばらつきがみられることも，筆者らの分析手法により，尺度の構成成分を最大限に引き出した影響と考えられる。本研究においても，日本語版PTGIの内的整合性は$\alpha=.92$と非常に高いことから，原版PTGIとは異なる因子構造が見出されたと考えられよう。

尺度の信頼性については，十分な内的整合性が得られた。尺度の妥当性については，日本語版PTGIとLOTとの相関関係から併存的妥当性が確認され，SDSとの相関関係から弁別的妥当性が確認された。また，日本語版PTGIとBig Five との関連をみた結果，原版PTGIと同様の結果が得られ，日本語版PTGIにおける妥当性が確認されたといえよう。

また，日本語版PTGIの第１因子「自己をとりまく状況への気づき」，第２因子「自己能力の発見・確信」については，神経症傾向との関連に違いがみられ，第１因子「自己をとりまく状況への気づき」とは無相関，第２因子「自己能力の発見・確信」とは負の相関がみられた。この２因子の最大の違いは，外傷体験後にポジティヴな要素を見出す対象が，周囲であるか自己であるかという点である。自己の精神面においては，後者の方が，より意味深く，影響が大きい要素であるとも考えられ，すなわち，「自己能力の発見・確信」は外傷後の立ち直りに，より重要な役割を果たすことが予測される。

今後の課題としては，本尺度をより安定したも

のにするため，再検査法による信頼性の検証が必要と思われる。また，尺度の内定整合性が非常に高いことから，改めて項目の検討を行う必要もあるといえよう。

引用・参考文献

Affleck, G., & Tannen, H. 1996 Construing benefit from adversity: Adaptational significance and dispositional underpinnings. Journal of Personality, 64, 892-922.

Costa,P.T.,Jr., & McCrae,R.R. 1985 The NEO Personality Inventory Manual. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.

Crowne,D.P.,& Marlowe,D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. Journal of Counsulting psychology, 24, 349-354.

Davise, C.G., Nolen-Hoeksema, S., & Larson,J. 1998 Making sense of loss and benefiting from the experience: Two construals of meaning. Journal of Personality and Social Psychology, 75, 561-574.

Janoff-Bulman,R.,& Frantz,C.M. 1997 The impact of trauma on meaning: From meaningless world to meaningful life. In M. Power & C.R.Brewin(Eds.), The transformation of meaning in psychological therapies. New York: Wiley. 91-106.

加藤進昌　2005　PTSDの現状と展望　精神科，6，203-205.

北村俊則・鈴木忠治　1986　日本語版Social Desirability Scaleについて 社会精神医学，9，173-180.

黒木宣夫　2003　拡大解釈されるPTSD PSIKO，29，16-21.

小島操子　1988　遺族のケアー悲嘆反応への危機介入ー　教育と医学，36，843-850.

日本学術振興会　1995　文部省学術用語集

小此木啓吾　1983　教育と医学　対象喪失，31，265-276.

Mcmillen, J.C., & Fisher, R.H. 1998 Perceived Benefit Scale: Measuring perceived positive life changes after negative events. Social Work Research, 22, 173-186.

大家尚文・坂口守男・山本朗・朝井均　2003　PTSD研究における「ストレッサー」と「外傷」についての検討（第Ⅰ報）　大阪教育大学紀要，52，153-163.

坂口幸弘　2002　死別後の心理プロセスにおける意味の役割―有益性発見に関する検討―　心理学研究，73，275-281.

坂口幸弘・柏木哲夫　2000　死別後の適応とその指標　日本保健医療行動科学会年報，15，1-9.

Scheier,M.F., & Carver,C.S. (1985) Optimism, coping, and health: Assessment and implications of generalized outcome expectancies. Health Psychology, 4, 219-247.

瀬藤及理子・阪　武彦・丸山総一郎　2004　死別後の悲哀に関するフロイトの見解とその批判　神戸親和女子大学研究論叢，37　21-38.

瀬藤及理子・丸山総一郎　2004　子どもとの死別と遺された家族のグリーフケア　心身医学，44，396-395.

Tedeschi, R.G. & Calhoun, L.G. 1996 The Posttraumatic Growth Inventry: Measuring the positive legacy of trauma. Journal of Traumatic Stress, 9, 455-471.

和田さゆり　1996　Big Five尺度　山本眞理子(編)　心理測定尺度集Ⅰ　サイエンス社　123-128.

中村陽吉　2000　楽観主義尺度(Life Orientation Test)　山本眞理子(編)　心理測定尺度集Ⅰ　サイエンス社　208-212.

（たぐち　かよこ　生活心理研究所）

（ふるかわ　まさと　生活機構研究科）